

## 5 幼児に発症した顎関節症の1例

○古澤潤一，大野秀夫

おおの小児矯正歯科（下関市）

顎関節症の発症は一般に10代前半といわれており、幼児期の発症は極めて稀である。今回我々は幼児期に発症した顎関節症1例を経験した。初診ならびに治療経過から今後の小児の歯科的管理を行う上での1つの指針になり得ると考え報告する。

〔症例〕

患児：A. O. 6歳1カ月 女児

初診：1990年1月10日

主訴：ウ蝕治療希望

既往歴：特記事項なし

現病歴：

2歳半頃熊本市の某歯科でウ蝕治療を行った。

3歳頃左顎関節部にclicking soundsを自覚したため主治医に相談したものの、経過観察の指示を受けた。その後soundsは消失しなかった。

家族歴：特記事項なし

現症：

体格、栄養状態ともに中等度であった。

顔貌は非対称が認められた。

顎運動所見では開口時の偏位がみられた。

聴診すると、最大開口時左顎関節部にclicking soundsが認められた。

萌出歯は

$\begin{array}{ccccccc} 6 & E & D & C & B & 1 & | & 1 & B & C & D & E & 6 \\ 6 & E & D & C & 1 & | & 1 & C & D & E & 6 \end{array}$ であった。

咬合状態は、下顎骨は極度の遠心位咬合状態を呈し、上顎はV字型歯列弓であった。

治療方針：

検査結果からいわゆる顎関節症と診断した。治療方針はまず顎口腔系の機能単位として咀嚼が行えるようにウ蝕処置を行うこととした。また本症例は井上らの不正咬合の要因分析では、骨格型要因と機能型要因を合せ持つ下顎骨の前後の劣成長と診断され、下顎骨の成長促進を期待して佐藤式FKOの装着を行う予定とした。なお、顎関節症の主因は極度の下顎遠心位咬合と判断し、機能的矯正装置で顎関節症症状の軽減を期待した。

治療および経過：

1月23日～3月14日：ウ蝕治療

3月26日：佐藤式FKO装着

6月1日：clicking sounds 消失

7月末現在、FKO継続使用中

まとめ：

本症例を通して、小児の歯科的管理において、顎口腔系を一つの機能単位として捉える必要性を改めて感じた。

## 6 保隙装置の有効性

—第一乳臼歯喪失時のクラウンループ保隙装置の場合

○宮崎映子、矢野里香、早崎治明、  
國武哲治、廣田和子、中田稔  
九大・歯・小児歯

小児歯科臨床において、乳歯を早期喪失した場合、喪失した部位のスペースを保ち、後継永久歯との円滑な交換を促すために、様々な種類の保隙装置が使用されている。

今日、保隙装置に関する報告は、かなり見られるが、保隙装置を装着することにより、喪失部位のスペースの変化を含めて、歯列にどのような影響、効果を及ぼすかを詳細に調査したものは少ない。

今回演者らは、保隙装置の中で、特にクラウンループ保隙装置に着目し、本装置の有効性を検討する目的で、歯列石膏模型を計測した。対象として、本学小児歯科外来において、片側第一乳臼歯のみを喪失し、クラウンループ保隙装置を装着した患児の中で、累年の石膏模型が採得されている症例を用いた。模型計測は、三次元座標読取り装置(XYZAX PJ400A)にて、行った。

計測にあたり、両側乳犬歯・両側第二乳臼歯及び健側第一乳臼歯の舌側歯頸最下点の5点を含む平面を基準平面とした。また、上顎は切歯乳頭最上点、下顎は中切歯舌側歯間乳頭最上点を基準平面に投影した点を原点とした。なお、ワックスバイトによる咬合の再現が困難な症例が多かったため、上下顎は別々に計測を行った。計測点として、主に、両側乳犬歯の尖頭・舌側歯頸最下点・遠心接触点、両側第二乳臼歯の近心接触点、両側第二乳臼歯・両側第一大臼歯の舌側歯頸最下点・舌側分界溝点・近心頬側分界溝点を選んだ。

以上の計測点より、歯列上の2点間の距離や、角度などを計算し、片側にクラウンループ保隙装置を装着した症例の患側と健側とを比較し、同一個人における経年的な歯列の変化を調べた。その結果、若干の知見を得たので報告する。